

鈴木健二郎先生を偲んで

In Memory of Professor Kenjiro SUZUKI

牧野 俊郎 (京都大学)

Toshiro MAKINO (Kyoto University)

e-mail: a50141@sakura.kudpc.kyoto-u.ac.jp

本学会元会長、京都大学名誉教授・芝浦工業大学教授 鈴木健二郎先生 には、病氣ご療養のところ、2007年4月25日、東京でご逝去になりました。享年67、余りに早いご他界でありました。

近くにあって長く先生からご指導いただいた者として、ここに、ご業績といくぶんの個人的な想いを記し、ご冥福をお祈り申し上げます。

鈴木健二郎先生は、1940年1月3日、当時の中華民国上海市にお生まれになりました。その後、ご郷里の岡山市で成長されて、京都大学工学部に入学、1962年に同学部機械工学科を卒業されました。当時同学部では実質的な5年制(形式的には大学院修士課程1年退学制)をとっていましたので、先生もその道を進まれました。先生は修士課程1年退学の後、1年だけ(株)神戸製鋼所にお勤めになりました。先生は、この1年のご経験をたいへん貴重なものとお考えになっていたようで、そのような経験のない私には、よく「君は修行が足りない」などと仰ったものです。

先生は、その1年の後、京都大学にもどられ、助手・助教授を経て、1986年に教授に昇任されました。先生がご担任になった講座(当時の小講座)は、京都大学の由緒ある講座でした。明治30年に京都帝国大学が創設されたときにまず開設されたのが、理工科大学の機械工学科と土木工学科でありました。その機械工学科の初代の教授は朝永正三先生で、その朝永先生は、物理学の振一郎先生の父君で哲学の三十郎先生の兄君でした。正三先生の次が菅原菅雄先生、その次が佐藤俊先生、そして鈴木健二郎先生でありました。

京都大学では、国際交流委員会委員長、大型計算機センター長、評議員、留学生センター長を兼任されました。2003年に定年退官され、京都大学名誉教授の称号を授与されました。



京都大学退官後には、芝浦工業大学大学院シニア教授となり、国際交流センター長、エネルギーフロー研究センター長を兼任されました。

先生は、海外においても、インペリアルカレッジ、デルフト工科大学、カリフォルニア大学バークレイ校、グルノーブル工科大学、スタンフォード大学日本センター、デルフト工科大学などの客員研究員や客員教授などを務められました。

また、文部省外国人留学生の選考等に関する調査・研究協力者会議委員、文部省学術審議会専門委員、国立情報学研究所 SINET 計画調整会議委員、最高裁判所任命知的財産関係専門委員などを務められました。

この間、先生は、永年にわたって流体力学・伝熱学・熱工学・エネルギー工学の教育と研究に努め、多くの優れた研究者・技術者を育成するとともに、多くの優れた業績を挙げて来られました。そのご業績を3つにとりまとめると、次のようであると理解しています。

第1には、複雑乱流の制御と伝熱促進に関する基礎研究がありました。エネルギー生産に関する工学系においては、エネルギー資源から得られる熱エネルギーをより利用しやすいエネルギーに変換する技術の進歩が望まれますが、先生は、その技術の第一の基礎となる対流熱伝達現象のメカニズムを明らかにするために、熱エネルギー装置のなかで起こる複雑乱流と熱伝達のマイクロ現象を流体力学的・伝熱学的に究明し、その現象を工学的に制御することをめざし、もって、エネルギーの有効利用を図るための具体的かつ実際的な手法を提案して来られました。

第2には、熱交換器の高性能化に関する研究がありました。エネルギー利用の高効率化を図るためには、熱エネルギー装置のもっとも重要な要素機器である熱交換器の高性能化が重要な研究課題になりますが、先生は、熱交換器における熱エネルギー輸送を支配する流体の流れと熱交換器のフィンなどの機器要素の固体壁面との関係に注目して、新しい機能・形式をもつ熱交換器を提案し、その有効性を実験と数値計算によって明らかにし、もって、熱工学・エネルギー工学の学術的・実際の進展に貢献されました。

そして、第3には、燃料電池とマイクロガスタービンの複合発電に関する研究がありました。今後の地球規模のエネルギーと環境の将来を展望するには、都市における分散型の電力供給システムが重要になりますが、先生は、この社会システム技術の構築のための最重点課題は燃料電池とマイクロガスタービンの複合発電にあると考え、上述の物理的・工学的な基礎研究に基づいて、系統的なエネルギーシステム工学の研究を企画・推進されました。この一連の研究は、先生の生涯の研究の集大成となるものであります。

先生は、学術界の運営にも尽力され、日本混相流学会副会長、日本伝熱学会副会長、日本機械学会熱工学部門長、日本伝熱学会会長、日本機械学会関西支部長、エネルギー・資源学会副会長などをお務めになりました。

国際的な活動としては、第9回せん断乱流国際会議(1993)、乱流熱・物質移動国際会議(1994)、第10回国際伝熱会議(1994)、第10回輸送現象国際会議(1997)、マイクロシステム伝熱輸送現象国際会議(2000)など、多数の国際会議の組織委員会の委

員・委員長として、会議の開催・運営に尽力されました。また、国際伝熱センターの活動・運営に参画し、科学委員会委員、理事会委員・副議長・議長を歴任されました。さらに、Heat Transfer Japanese Research, International Archives of Heat and Mass Transfer, International Journal of Transport Phenomena, Hybrid Methods in Engineering, International Journal of Heat and Mass Transfer, International Communication of Heat and Mass Transferなどのエディターや顧問委員を務めるなど、国際学術誌の編修に尽力されました。

これらの学術活動に対して、日本機械学会論文賞、日本伝熱学会学術賞、日本機械学会熱工学部門国際功績賞、ポーランド国高等教育省功績栄誉賞、国際伝熱センター Fellowship Award、日本機械学会熱工学部門永年功績賞などが贈られました。

以上のように、先生は、永年にわたって、流体力学・伝熱学・熱工学・エネルギー工学などを融合する総合的な工学研究を推進し、伝熱学の新領域への展開、流体熱工学の構築、さらには、熱交換技術とエネルギー変換技術の新展開を図り、斯学の進展に多大の貢献をなして来られました。また、国際的な学術界において指導的役割を果たして来られました。

先生には、2006年の夏、Sydneyで開かれた第13回国際伝熱会議の折にお目にかかりましたが、それが私には最後の先生になってしまいました。Sydneyの先生は、お元気そうで、かくしゃくとしていらっしゃるように見えました。国際伝熱センターの理事会議長として、国際的なリーダーの立場で堂々と振舞っておられた先生を、式典の大会場の片隅から拝察し、改めて鈴木先生の国際性を頼もしく感じていました。後に知ったことですが、先生は、このとき、すでに肝臓癌と戦っておられたとのことでした。

Sydneyの会議の折に、日本からMax Jacob Awardの候補を推薦しようという話が持ちあがりました。帰国後になんん人かの伝熱・熱工学の者たちが集まって協議し、先生をこの賞に推すことにしました。2007年6月の同賞の推薦期限をめぐり、先生のご業績をまとめ、また日本と欧米の研究者に推薦状を依頼するなどの作業を進めていました。同年4月、作業は完了に近づいていました。

2007年4月25日、同僚の吉田英生教授が、沈痛な面もちで私の部屋を訪ねて来ました。いつもは軽い冗談から入って来る彼のような異常であったのを憶えています。まさか、と思って絶句しました。その日は水曜日でした。二人はその日の「熱力学」の講義を休講にして、ご冥福を祈り、みなさんへのご連絡にときを送らせました。

鈴木健二郎先生は、たいへんなご業績とともに、すばらしいご人脈、すばらしいお弟子さんを育てて逝かれました。その方々とともに、まだ先生のご逝去がしっかりと来ない私は、こののち時間を掛けて先生を偲びたく思っています。

振り返りますに、私には、上に記したご業績より、先生のお人ごとに教えられることが多かった

のかと思います。先生には京都大学の機械系工学の同窓会に先生と同級生が多くいらして、お会いすると、その方々からは、「牧野先生、あのね、鈴木がねえ、...」と話しかけられて戸惑うことがよくありました。戸惑いながらも、先生はそんな方であったのかと思ってほっとするひとときをもったものです。

この7月、Vancouverでの日米熱工学会議の折には、小さい鈴木追悼セッションを催しました。11月に京都大学で開催の日本機械学会の熱工学コンファレンスでは、先生を偲ぶ追悼のセッションを設けます。どうぞお訪ね下さい。

鈴木健二郎先生のご冥福をお祈り申し上げます。

鈴木健二郎先生の思い出

Memoirs of Prof. Kenjiro SUZUKI

康 倫明 (株式会社ダイキン環境・空調技術研究所)

Yoon-Myung KANG (Daikin Air-Conditioning R&D Laboratory, Ltd.)

鈴木健二郎先生には草創期の乱流数値解析や循環乱流の熱伝達など、古きよき時代に研究、指導をいただきました。当事、先生の滞在先だったインペリアルカレッジ、デルフト工科大学から時折いただくお便りは「眼からうろこ」でした。満を持して投稿した先生と共著の論文は、数値解析という概念が理解してもらえず掲載まで苦労しましたが、いまとなればなつかしい思い出です。「新しいことは簡単には受け入れられない」こともあると学びましたが、先生の落ち着いた対応はいつも私の行動規範になっています。

先生の生き方について、「人をだますより、だまされる方がいい」という言葉が印象に残っています。京都大学退職記念の折に教室で語られたのですが、先生の誠実を示すと共に、当時先生が携わっていた大学運営の苦勞がしのばれる言葉でした。

ご家族への愛情、とくに奥様への変わらぬ愛情は羨むほど暖かいものでした。先生の京大時代の門下生による「サヴァサヴァ会」という集まりがあります。気軽に「サヴァサヴァ」とあいさつできるような集まりにという先生の命名ですが、そこでサヴァサヴァ楽団という弦楽+フルートのアンサンブルをやっています。サヴァサヴァ二次会の酒席で、奥様の昭子様は晩学でバイオリンの稽古をされていると伺い、ではサヴァサヴァのメンバーでアンサンブルをやろうと盛り上がったのですが、しばらくほおっておいたところ、半年ほどたった5月の連休中に突然、先生から丁重なメールが届きました。どうも奥様が本気らしいという内容です。急遽、木枝茂和・香織夫妻、平井悦郎君ら関連メンバーに声をかけ、なんとか次のサヴァサヴァ会に間に合わせましたが、それもいままえば先生の奥様への愛情からだったのです。京都大学ご退職記念パーティーではピアノで長女の麻子さん、孫の奈美ちゃんにもバイオリンで入って頂き大いに楽しませてもらいました。



2006年10月28日 京都聖護院御殿荘にて奥様と

先生の学位論文は振動燃焼の研究についてでしたが、その後の研究は複雑乱流の現象論、数値解析、その応用と研究を進められました。伝熱研究としては先が見えた段階に至っていたように思います。また、京大、芝浦工大を通じて国際交流に意欲を燃やされ、京大では留学生用のカリキュラムをまとめられています。近年は固体酸化物燃料電池を核とした分散電源システムの研究を主宰されていましたが、これからという時期に後進に道を譲ることになりました。芝浦工業大学に移られて4年、新しい仕事が立ち上がったところでした。

最後にサヴァサヴァ会のメンバーから寄せられたエピソードを紹介させていただきます。

不肖の弟子で、今は伝熱とはまったく関係のない仕事をしておりますが、“Turbulence”の輪読で苦しんだこと、伝熱学会への参加など、学問の入り口を覗かせていただいたことが記憶に焼きついています。今は、不真面目な学生どもの指導も忘れ、安らかにお休みください。

1974年卒 馬場 稔

私たち学生と一緒にのコンパでのお得意の歌は、村田英雄の「王将」だったような記憶があります。初めて聞いた時は、「勤勉実直の学者」の外見とは違って豪放なご性格かなど不思議に思ったものですが、「吹けば飛ぶような将棋の駒に、賭けた命を笑わば笑え・・・」 そうか、一度の人生を信念を持って生きるという心意気だったのでは、と今になって気がつきました。あいかわらず、真意を読めない未熟者とお叱りを受けるかもしれませんが。

1976年卒 田中 純

研究室では厳しい先生で、研究のうで妥協することは一切ありませんでした。その一方で、学生が何かを達成すると、まるで自分のことのように喜んでくださいました。弟子を私用に使ったりすることを戒めておられたようで、私達は少し寂しい思いをしました。その一方で対等な関係は大好きで、同窓生が国際会議の折りなどに奥様ともどもお誘いすると、おしゃべりをしながらワインや料理を楽しんでおられました。

1978年卒 川口靖夫

鈴木先生はボート部の部長も務められていた方で、突然の訃報に驚いております。ご冥福をお祈りします。

1978年卒 岡部好男

鈴木先生は、先生というより兄のような頼もしく親しみやすい存在でした。一方で研究では、常にデータに厳格な方で私が実験や数値計算結果を持ってゆくと、いつも「データがまだ足りない」と口癖のようにおっしゃり、細かくご指導いただいたものでした。4回生の卒論を提出した春、当時の宇治の先生の官舎にお邪魔し、奥様に夕食をご馳走になった時のこと、奥様が「主人は家で、食事を味見する時にもすぐ「データが足りない」といってなかなかほめてくれないんですよ」とおっしゃったのを今でも覚えております。研究でも、プライベートでもデータに厳しい姿勢を貫いておられた鈴木先生のそんな生き方は、私がお後技術者として仕事を進めてゆく中で、常に心の中で

規範となりました。西京区にご自宅を新築された折も、完成早々にさっそくお招きに預かりました。その折、お忙しい研究の最中にこつこつと挑戦され、完成された巨大なジグゾパズルをお見せ頂きましたね。ジグゾパズルひとつでも手を抜かない、やると決めたらどこまでもやるお姿に感動したことを覚えております。この時のことを思い出すたびに、「やると思えばどこまでやるさ。」という先生の十八番の歌声が、私の胸に響いて来ます。

1979年卒 千々木 亨

定例研究会で実験結果を報告しました。できが悪かったためか、質問や議論で日本人の学生も留学生もけんけんごうごう。收拾が付かないくらい騒然となりました。わたしは恥じ入ってじっとうつむいていました。すると、「この伝熱工学研究室のメンバーは、皆本当の家族のようなものだから、どんなこともフランクに話すのだよ。」といったことを、鈴木先生は両隣の留学生に英語で極めてにこやかに繰り返して仰いました。今でも忘れられません。

1988年卒 喜多茂雄

先生が居ると場が明るくなる、太陽のような存在でした。始終優しく、しかし時に厳しくご指導いただきました。今は明るい笑顔しか思い浮かびません。先生とは何度か海外にご一緒しました。ポルトガル、学会が終わりレンタカーを借りて、青い海が見えるレストランを目指しました。先生、最初は少し練習なさって、その時には、さすがの世界の健二郎先生も練習するんだなあ、と思いました。道中は結構な距離があった筈ですが、ドライブ中は始終奥様と楽しそうに会話をなさって、僕にはとても短く感じられました。その時、先生と一緒に見た青い海と、先生と奥様の写真、先生の笑顔が忘れられません。「チャンスの女神に後ろ髪は無い」先生が繰り返し仰っていた言葉を噛みしめています。

1989年卒 稲岡恭二

サヴァサヴァ